Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-27

文の同義性と深層格 ： 名詞句の相互交換を中心に

定延, 利之

(Citation)
近代,71:69*-88*

(Issue Date)
1991-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001625

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001625

文の同義性と深層格

——名詞句の相互交換を中心に——

定　延　利　之

1.　はじめに

タイトルの「深層格（deep case)」とは、Fillmore（1968）等の格文法理論以来、特に重視されている概念で、文中の名詞句が述語に対して有する一定の意味的関係の型を表す。真理条件的意味の解釈に多大な役割を果たす深層格は、より微細な認知的意味への関心が高まる現在においても、依然として価値を持つ。ただ、こうした深層格が設定に客観的基準を欠き、恣意性を排除しきれないこともまた事実である。「深層格は研究者の数だけ存在する」とも言われる由縁だが、Fillmore 自身が深層格の目録に改変を繰り返しているように、深層格は1研究者の内部ですら必ずしも安定しない。本稿では2名詞句の相互交換という操作を中心に、従来提出されてきた幾つかの深層格を検討したい。なお本稿は対象言語を現代日本語に限定するが、これは特に本稿後半で「弾当て代換」（仮称）を扱うことに起因する。弾当て代換とは現代日本語に見られる現象だが話者間で認容の差が著しく、全く認容しない話者も存在する。更に、弾当て代換と並行する他言語の現象は（筆者の知る限り）全く記述・考察されていない。他言語においても現代日本語同様、話者間で認容の差が大いに有り得ることを考えると、他言語との対照研究にはことさら慎重で広範な吟味・調査が要求されるだろう。こうした事情の下に、本稿では現代日本語について、今後の対照研究を見据えた、やや理論寄りの足場固めを目指す。

2. 文の対称的解釈

1章で述べた「2名詞句の相互交換」とは、例えば(1a)(1b)や(2a)(2b)を各々結ぶ操作を言うが、[1] (1)は(a)(b)間の同義性が乏しく、本稿では議論しない。(a)(b)間に或る程度の同義性が見られる(2)のような場合のみを以下では取り上げ、深層格がこの同義性を反映するべきかどうかを考える。具体的に言うと「(2a)(2b)の太郎と花子が単一の深層格を担い、結果として(2a)(2b)の深層格構造が等しい」とすべきかどうか、という問題を考える。

(1) a. 太郎が花子にもたれた。　　(2) a. 太郎が花子と戦った。

　　b. 花子が太郎にもたれた。　　b. 花子が太郎と戦った。

ところでこの問題に対して、従来の諸説（の多く）は(2a)(2b)の曖昧性を持ち出してくる。即ち(2a)にせよ(2b)にせよ、複数の解釈を持っており、上の問いに対する答は、これらの解釈によって異なるというのである。そこでまず、これらの解釈（以下で「対称的解釈」と言う）を観察しておく必要が有るだろう。

2.1. 4種の対称的解釈

本稿では「対称的解釈」を(3)のように定めておく。対称的解釈には様々な種類が考えられる。

(3) 文中に2個の名詞句X・Yが生起しているとする。或る文解釈の下で、その2名詞句の指示物（X'・Y'とする）が事態の中で互いに同じような位置を占めるなら、そしてその時に限り、その文解釈はX'・Y'に対する対称的　解釈である。

(4) a. ［太郎と花子］が戦った。　　（例文中の［ ］印は名詞句の等位

　　b. ［花子と太郎］が戦った。　　接続構造を表す。以下も同様。）

例えば(4a)にせよ(4b)にせよ、太郎と花子に関して少なくとも(5)の3種の対称的解釈を持つ。これらを各々「相互解釈」「並行解釈」「独立解釈」と仮

称して互いに区別しておく。

(5) a. 「太郎対花子という、1つの戦いが有った」との解釈──相互解釈

b. 「太郎と花子が、文に表現されていない何者かを相手にした、1つの戦いが有った」との解釈──並行解釈

c. 「太郎対何者か、花子対何者かという、合計2つの戦いがあった」との解釈──独立解釈

また例えば(6a)にせよ(6b)にせよ、太郎と花子に関して少なくとも(7)の2種の対称的解釈を持つ。(7a)は(5c)と同じ独立解釈だが(7b)は以上3種とは異なる解釈で、これを「組織解釈」と呼ぶ。各解釈の詳細は定延（1990b)を参照されたい。[2)]

(6) a. ［太郎と花子］が手紙をくれた。

b. ［花子と太郎］が手紙をくれた。

(7) a. 「太郎から1通、花子から1通、合計2通の手紙が届いた」との解釈

b. 「太郎と花子の2人が合作で書いた1通の手紙が届いた」との解釈

以上4種の対称的解釈を挙げたが、この4種の分類が網羅的・先験的と言うわけではない。対称的解釈は他にも考えられるかもしれないし、対称的解釈の分け方も他に有るかもしれない。ただ本稿の分け方は、［異なる文型に属する文どうしの換言[3)]可能性］［数量名詞句の統合/分解による換言[3)]可能性］という、少なくとも2つの言語現象を反映するものではある。これを以下に説明する。

2.2. 異なる文型に属する文どうしの換言可能性

換言の具体的対象として、(8)〜(19)の諸文型に属する文を考えてみよう。(8)(9)の文型に属する文を「A類等位文」、(10)(11)の文型に属する文を「B類等位文」と呼び、以下同様に(12)(13)、(14)(15)、(16)(17)、(18)(19)の文型に属する文を各々「ト文」「ト一緒ニ文」「ニ文」「カラ文」と呼ぶ。A類等位文とB類等位文を併せて「等位文」と言うことが有る。(　) 印は生起

の任意性を、「P」は適当な述部[4]を表している（以下も同様）。

(8)［XとY］が	P。	(9)［XとY］を	P。
(10)［XとYと］が	P。	(11)［XとYと］を	P。
(12)　XがYと	P。	(13)　XをYと	P。
(14)　XがYと一緒に	P。	(15)　XをYと一緒に	P。
(16)　XがYに	P。	(17)　XをYに	P。
(18)　XがYから	P。	(19)　XをYから	P。

以上に挙げた等位文・ト文・ト一緒ニ文・ニ文・カラ文が、どのような対称的解釈を持ち得るかを、次頁の表1にまとめる。表1中の「＋」印は、当該文が当該解釈を、述部によっては持ち得ることを表し、一方「－」印は、当該文が当該解釈を持ち得ないことを表す。「述部によっては」とは、例えば(20)がA類等位文でも相互解釈を持たないこと、(21)がト文でも相互解釈を持たないこと等を考慮した結果である。なお表1で「後述」と記した箇所は2.5で説明する。

(20)［太郎と花子］が独吟した。　(21)　太郎が花子と散歩した。

例えば、A類等位文(4a)が、相互・並行の2解釈の場合はト文（2a)に換言できるが独立解釈の場合は(2a)に換言できないこと、同じく(6a)が、独立解釈の場合はB類等位文(22)に換言できるが組織解釈の場合は(22)に換言できないこと等は、表1と符合する。こうした換言可能性は先行研究でもよく記述されてきたが、必ずしも解釈の区別根拠として明示されていたわけではない。

(4) a.［太郎と花子］が戦った。　(2) a.　太郎が花子と戦った。

(6) a.［太郎と花子］が手紙をくれた。

(22)［太郎と花子と］が手紙をくれた。

文＼解釈	組織	相互	並行	独立
A類等位文	＋	＋	＋	＋
B類等位文	－	＋	＋	＋
ト文	－	＋	＋	－
ト一緒ニ文	－	－	＋	－
ニ文・カラ文	－	＋(後述)	＋(後述)	－

表１：文と対称的解釈の可能な結びつき

2．3．　数量名詞句の統合/分解によるルースな換言の可能性

２人は［１人と１人］を「統合」したもの、逆に［１人と１人］は２人を「分解」したものと言える。相互解釈は(23)(24)双方で可能だが、並行・独立の２解釈は(23)のみで可能で、(24)では不可能である。つまり(23)は相互解釈の場合は(24)に換言できるが、並行・独立の２解釈の場合は(24)に換言できない。このような換言可能性については従来、筆者の知る限り言及が無い。

(23)　兄弟の２人が戦った。[5)]　　(24)　兄弟の［１人と１人］が戦った。[5)]

2．4．　対称的解釈の、文型・述部からの独立性

４種の対称的解釈についての説明は以上だが、ここで(25)を述べておく。

(25)　X'・Y' に関して文が或る種の対称的解釈を持っているとする。その時、対称的解釈の種類は――

a.　その事態を表現する文の文型が変わっても、変わらない。

b.　その事態を表現する文の述部にとって名詞句の必須性が変わっても、変わらない。

c.　その事態を表現する文に様態・ムード[6)]が指定されても、変わらない。

(25a) は、例えば「太郎対花子という、１つの戦いが有った」という解釈

がト文(2a)にとってもA類等位文(4a)にとっても相互解釈だということである。これは特に説明は不要だろう。

(2a)　太郎が花子と戦った。　　(4a)［太郎と花子］が戦った。

(25b)は、例えば「太郎と花子が、文に表現されていない何者かを相手にした、1つの戦いが有った」という対称的解釈（A解釈とする）が、戦ったを述部とする(2a)にとっても、共闘したを述部とする(26)にとっても並行解釈だ、ということである。[7)]

(2a)　太郎が花子と戦った。　　(26)　太郎が花子と共闘した。

確かに、「A解釈は(26)にとっては相互解釈」と考えることも、一見妥当である。というのは、ト一緒ニ文(27)がA解釈を持たないからで、このことは「A解釈は(26)にとっては相互解釈」と認めさえすれば、前述の表1からスムーズに説明できる。

(27) ?? 太郎が花子と一緒に共闘した。

しかしこの考えはおそらく妥当ではない。というのは、図1中の「+」印はあくまでも、「当該解釈を、述部によっては持ち得ること」を表すに過ぎないからである。つまり(27)がA解釈を持たないことは、「述部共闘したが文中のと一緒にと相俟って、A解釈を馬カラ落チテ落馬シタ式に不自然にしているから」といった具合に、述部共闘したのせいだと考えても説明できる。わざわざ「A解釈は(26)にとっては相互解釈」と認める必要は無い。更に(28)がA解釈を持たないことも、「A解釈は(26)にとってもやはり並行解釈」と考える裏付けとなる。

(28) ?? 兄弟の［1人と1人］が共闘した。

戦ったと共闘したに関する以上の考察は、(25b)と同時に(25c)をも導く。即ち、述部共闘したは単に「戦った」というだけでなく「共に」という様態指定を行うが、対称的解釈の種類を考える時、これは無視して構わない。従って(29)〜(31)についても(32)と全く同様に対称的解釈を問えることになる。勿論、例えば(29)では、ガ格名詞句指示物の太郎には結婚歴が無くてはならないがト

格名詞句指示物の花子には結婚歴は有っても無くても構わない。その点では両者は確かに非対称的で、太郎・花子を相互交換すれば文意は大幅に変化するが、以上に述べてきた対称的解釈の種類自体はこの変化に関与しないことになる。

(29) 太郎が花子と再婚した。　(30) 太郎が花子といやいや結婚した。

(31) 太郎が花子と結婚したがった。　(32) 太郎が花子と結婚した。

2.5. ニ文やカラ文の並行・相互解釈

前述の表1では、ニ文やカラ文が並行解釈や相互解釈を、述部次第で持ち得るとした。まず並行解釈だが、例を(33)に挙げる。これは(34)に並行解釈を認めることと、上述(25)の主張を認めることの結果でもある。

(33) a. 太郎が花子に同行する。　(34) a. 太郎が花子と行く。

b. 花子が太郎に同行する。　b. 花子が太郎と行く。

次に相互解釈だが、これは定延（1989,1990a,1990b）で考察した弾当て代換（仮称）を考慮したものに他ならない。「弾当て代換」とは例えば、［静止している白玉に向かって赤玉が移動し、両者が衝突する］という事態が(35a)だけでなく(35b)によっても表現可能なこと、［わなにかかって静止している兎がおり、わなだけが移動して両者の一体関係が解除される］という事態が(36a)だけでなく(36b)によっても表現可能なこと等を指す。定延(1990b)では(35b)(36b)タイプの様々な実例を挙げて弾当て代換を考察したが、尤も定延(1989,1990a,1990b）でも述べたように、弾当て代換の成立を認容しない話者も存在する。[8)]

(35) a. 赤玉が白玉に当たった。　(36) a. わなが兎からはずれた。

b. 白玉が赤玉に当たった。　b. 兎がわなからはずれた。

従来、ト文とニ文の比較において(37)～(40)のような例が挙げられ、「ト文は双方的な動きを、ニ文は（ガ格名詞句指示物からニ格名詞句指示物への）一方的な動きを表す」等と記述されることが多かった（例.久野1973・井上1976・寺村1982)。

(37)　太郎が花子と会った。　　(38)　太郎が次郎とぶつかった。

(39)　太郎が花子に会った。　　(40)　太郎が次郎にぶつかった。

しかし、例えば(41)(42)を極めて自然と判断する話者（即ち弾当て代換成立を認容する話者）が相当数存在するように、これは過度の一般化と言うべきだろう。

(41)　東京駅のベンチに1日座っているだけで、10人もの知人に会った。

(42)　ぼんやり立っていた太郎は、走ってきた車にぶつかって怪我をした。

尤も従来説も、上の「双方的な動き」「一方的な動き」を純粋に物理的なものとしていたわけではない。久野（1973）では「動き」に心理的な要因が関係することが説かれ、先生は心理的に不動であるから(43)は（適格だが）一般に用いられず、私と先生が、共に出向いた場合でも(44)が用いられる、とされている。

(43)　私は先生と会いに、渋谷に行った。

(44)　私は先生に会いに、渋谷に行った。

しかし、たとえこのように認知的なふくらみを持たせても、(42)の事態を「太郎から車への一方的な動き」と認めることは不自然だろうし、仮にそう認めたところで、「動き」という概念が抽象的で難解で反証可能性の低いものになるばかりだろう。つまり(41)(42)のような例に対しては、「認知的な動／静」等といった、動静のアナロジーによる説明は不自然ないし非効率的であろう。定延(1990b）で詳述したが、例えばキスしたのように、相互交換される2名詞句の指示物に関して述部の［対称性］が低い場合（即ち述部がその2名詞句指示物を、同じようなものどうしだと規定する力が弱い場合）なら、従来の記述は一応妥当に思え、[9] (45a)(45b)は双方的、(46a)(46b)は一方的な動きを表す（従って(45)だけが(a)(b)間で同義性を有する）と言える。しかし会った・ぶつかったのように述部の［対称性］が高ければ、従来の記述は妥当しない。結局(39)(40)は、接触に至るまでの動静関係を何も指定せず、ただガ格名詞句指示物とニ格名詞句指示物とが1つの接触事態を構成したことだけを述べてい

ることになる。これは上述の相互解釈に他ならない。

(45) a.　太郎が花子とキスした。　(46) a.　太郎が花子にキスした。

b.　花子が太郎とキスした。　b.　花子が太郎にキスした。

3.　対称的解釈と深層格

2章冒頭で述べたように、「単一の文が複数の対称的解釈を持つ時、各対称的解釈どうしの違いは、名詞句が担う深層格の違いと（部分的にせよ）対応する」という見解がこれまでに提出されている。本章ではこの見解を(47c)として検討するが、その前に(47a)(47b)の見解にも言及しておきたい。

(47) a.　解釈の違いは「述語が特定の深層格を要求するか否か」と対応する。

b.　解釈の違いは「文の基底構造の違い」と対応する。

c.　解釈の違いは「名詞句が担う深層格の違い」と対応する。

3.1.　解釈の違いは「述語が特定の深層格を要求するか否か」と対応するか？

仁田(1974,1980) では、ト文と結びつく相互解釈・並行解釈が論じられている。仁田説によれば、両解釈の違いは［述語が〈あい方〉格を要求するか否か］と対応する。即ち、結婚するは〈あい方〉格を要求するので(48)は専ら相互解釈が、他方出かけるは〈あい方〉格を要求しないので(49)は専ら並行解釈がなされる、とされる。結局ト文に関する限り、仁田説では対称的解釈の曖昧性は存在せず、単一の文は対称的解釈を1つしか持たない。

(48)　花子は太郎と結婚した。　(49)　花子は太郎と出かけた。

しかし、述語が〈あい方〉格を要求するト文は、相互解釈だけでなく、並行解釈をも持つのではないか。例えばここがゲームセンターで、テニス（ダブルス）のテレビゲーム機が有るとしよう。常連客の2人がチームを組んでゲーム機に向かい、コンピュータの操るチームと対戦した後で、1人がもう1人に向

かって「おまえと戦うといつも負けるなあ」等と並行解釈のト文でなじることは、別段不自然でないと思われる。前章でもこうした判断に基づいて「A類等位文(4)が、相互・並行の2解釈の場合はト文(2)に換言できる」等としてきたわけである。[10)]

(4) a.　[太郎と花子] が戦った。　(2) a.　太郎が花子と戦った。

　　b.　[花子と太郎] が戦った。　　b.　花子が太郎と戦った。

尤も戦うと結婚するでは、並行解釈の思い浮かべ易さに若干の差が有るようである。本稿では(48)に相互・並行の2解釈を認めるが、同時に相互解釈の優越も認めたい。単一の文が複数種の対称的解釈を持つ時、どの対称的解釈が優先されるかは、(a) その文の属する文型　(b) 競合する対称的解釈の種類　(c) 文脈・状況　(d) 述語の少なくとも4点に影響されると考えられよう。

3.2.　解釈の違いは「文の基底構造の違い」と対応するか？

奥津(1967)・井上(1976)等の変形文法の立場では、A類等位文が持つ相互・並行・独立の3解釈が、各々異なる基底構造と対応づけられている。両説を(50)にまとめる。[11)]

(50)　A類等位文（例. [太郎と花子] が戦った）は解釈によって基底構造が異なる。

　a.　相互解釈の場合は、両説ともト文太郎が花子と戦ったが基底構造。

　b.　並行解釈の場合は、奥津説では(a)と同様ト文太郎が花子と戦ったが基底構造（但し花子に付くとの機能が異なる）。井上説ではA類等位文 [太郎と花子] が戦った自身が基底構造で、並行解釈のト文はこれから派生される。

　c.　独立解釈の場合は、両説とも2個の文太郎が戦った・花子が戦った（の等位接続構造）が基底構造。

しかし、例えば［窓から見ると、おおぜいの友達が敵味方に分かれて雪合戦をしていたようだが、遠目のこともあり、誰がどちらの軍に属していたのかは

わからなかった］という状況でも、皆が戦った・彼らが戦った・おおぜいが戦った等と言い得るだろう。これらの文の基底構造は両説によれば（相互解釈だから）ト文の筈だが、皆・彼ら・おおぜい等をどう分解してト文を作るのだろうか。独立解釈・（奥津説での）並行解釈の場合にも同様の疑問が浮かんでくる。

また 2.5 で述べた通り、弾当て代換のニ文・カラ文が相互解釈を持つ以上、それらの文も両説によれば基底構造はト文の筈だが、基底となるべきト文は自然な場合（例.(52)）ばかりではなく、不自然な場合（例.(53)）も有る。[12)]

(35) a.　赤玉が白玉に当たった。
　　 b.　白玉が赤玉に当たった。

(51) a.　雷が避雷針に当たった。
　　 b.　避雷針が雷に当たった。

(52) a.　赤玉が白玉と当たった。
　　 b.　白玉が赤玉と当たった。

(53) a. ??雷が避雷針と当たった。
　　 b. ??避雷針が雷と当たった。

3．3．　解釈の違いは「名詞句が担う深層格の違い」と対応するか？

更に井上説によれば、ト文(2a)の持つ相互解釈と並行解釈の違いは、基底構造だけでなく、花子が担う深層格の違いとも対応する。即ち、花子は相互解釈時には対称格を担うが並行解釈時には動作主格を担う（因に太郎は両解釈とも動作主格を担う）。[11)]「ト文のト格名詞句は、対称的解釈次第で、様々な深層格を担う」とするのは、井上説に限ったことではない。筆者の知り得た主なものを表 2 にまとめる。表中、Fillmore(1966a,1966b,1968,1969) は、その主張を日本語に適用した結果として付した。また仁田説では前述のとおり(2a)に並行解釈は認められないが、(2a)の述部を散歩したと置き換えた場合の仁田説での扱いとして、「共同行為者」を載せる。「共同行為者」は「格」でないとされているが、これは当面の議論に影響しない。

(2a)　太郎が花子と戦った。

諸説＼解釈	相互解釈	並行解釈
仁田(1974,1980)	＜あい方＞格	共同行為者
奥津(1975)	対称格	共同格
井上(1976)	対称格	動作主格
成田(1988)	[受け手]	[動作主]
Fillmore(1966a,1966b,1968,1969)	Comitative	Comitative

表２：「(2a)の花子が担う深層格」諸説

しかし相互解釈の場合であれ並行解釈の場合であれ、(2a)(2b)を使い分ける基準は、［表現者の視点］とすることができる。つまり［太郎と花子のいずれの方に表現者の視点が置かれるか］次第で、(2a)(2b)のいずれを用いるかが決まることがあるわけだが、この時、表２の諸説によれば、太郎・花子が各々担う深層格も同時に決まってしまう。とすれば、ガ格名詞句（(2a)では太郎・(2b)では花子）の担う動作主格と、ト格名詞句（(2a)では花子・(2b)では太郎）の担う、表２記載の諸々の深層格との違いは、［表現者の視点］によるものだということになる。そうなれば深層格は真理条件的意味に留まらず、文意の微細な部分にまで立ち入ることになり、結果として文間のラフな同義関係は深層格では殆ど捉えられなくなってしまう。相互・並行解釈のいずれの場合であれ、ト文のト格名詞句はガ格名詞句と同じ格（この場合、動作主格）を担うと考えるべきだろう。

(2) a.　太郎が花子と戦った。

　　b.　花子が太郎と戦った。

３．４．表１の説明

本章ではト文の曖昧性に焦点を当てて諸説を検討してきたが、特に3.2で述べた奥津(1967)・井上(1976)は、ト文ばかりでなくＡ類等位文についても対称

的解釈を考察している。結局のところ両説は、表１のような、文と対称的解釈の結びつきを説明しようとしたもので、例えば「Ａ類等位文が独立解釈を持つのに何故ト文は持たないか」等といった疑問に対し、Ａ類等位文やト文に各々何通りかの深層構造を設定することで答えようとしたものと言える。両説を退けた以上、本稿の立場から表１の説明（但しト一緒ニ文は自明として省く）を試みたい。表１を再掲する。

まず、様態・ムードを除いた２つの命題〈ＸがＰ〉〈ＹがＰ〉を考えよう。[13] これらの命題が妥当する事態が各々文ＸがＰ・ＹがＰで表現できる以上、２命題が共に妥当する事態は、この２文をまとめた形式、即ち等位文で表現できる。

この「２命題が共に妥当する事態」は、Ｘ'－Ｙ' 間の緊密性に関して少なくとも３つのパターンを持つ。①「２命題の妥当する状況が重なり合わなければならない必然性が無く、事態が、相互に独立したこの２つの状況（小事態）から構成される」と認知される場合、Ｘ'－Ｙ' の緊密性は最も低い（独立解釈）。②「２命題の妥当する状況が完全に重なり合わなければならず、一方が妥当すれば他方も妥当し、一方が妥当しなければ他方も妥当しない」と認知される場合、Ｘ'－Ｙ' 間の緊密性は最も高い（相互解釈）。③「２命題の妥当する状況は重なるが、完全に重ならなければならない必然性は無く、一方が妥当しても他方が妥当するとは限らない」と認知される場合、Ｘ'－Ｙ' 間の緊密性は中程度に高い（並行解釈）。[14]

文＼解釈	組織	相互	並行	独立
Ａ類等位文	＋	＋	＋	＋
Ｂ類等位文	－	＋	＋	＋
ト文	－	＋	＋	－
ト一緒ニ文	－	－	＋	－
ニ文・カラ文	－	＋	＋	－

表１：文と対称的解釈の可能な結びつき

等位文にはA類とB類が有り、どちらも3パターンを表現できるが、B類は並立助詞とが等位接続構造に2回生起しているため、〈数え上げ〉のニュアンスが生じ、結果として総記が含意される。［太郎と花子と］が欠席したと言う場合、欠席者は他にいないという含みが生じる。この含みはA類等位文［太郎と花子］が欠席したには無い（或いは少ない）。

以上では、〈XがP〉〈YがP〉という2命題の妥当する事態について述べたが、これとは別に、〈［XとY］がP〉という命題の妥当する事態を考えることもできる。この時、X'とY'は合体して、個の総和を越えた組織となることで初めて事態構成物として機能しており、X'－Y'間の緊密性は上の3パターンよりも高い（組織解釈）。この事態はA類等位文でのみ表現でき、B類等位文では表現できないが、これはX'とY'が合体してできた事態構造物を、［XとY］とは呼べても［XとYと］とは呼べないことに因る。［XとYと］という形式は、やはり末尾の並立助詞に因るものだろうが、表現者が発話時に頭の中で該当要素を数え上げ、即席に作り上げた集団を表す。従ってこの集団はバラバラであり、個の総和を越えた組織としては機能しない。先月は［田中と山川と］がバンド解散を発表したと言う場合、田中と山川の2人から成るバンドの解散発表（即ち組織解釈）とは考えにくいが、先月は［田中と山川］がバンド解散を発表したならこの限りではない。

なおト文・ニ文・カラ文は、前景－背景の差を持つ形式であるが、前景化・背景化という認知的操作が単一状況内の事態構成物間に対してのみ働くと考えれば、ト文・ニ文・カラ文が独立・組織の2解釈を持たないことにも説明が付く。

4．弾当て代換と深層格

2.5では弾当て代換を、ニ文・カラ文の相互解釈とした。3.3では、相互解釈時の2名詞句が同じ深層格を担うと結論づけた。つまり弾当て代換が成立する

時、問題の2名詞句は同じ深層格を担うのである。以下これを対象格と仮定して、弾当て代換に関係する諸事実①②③を説明する。相互交換される2名詞句をX・Y、その指示物を各々X'・Y'としておく。

① 弾当て代換の文が、時として等位文やト文に換言できること。

一般に等位文・ト文はX'・Y'に関して述部の［対称性］が高く（即ち述部がX'・Y'を、同じようなものどうしと規定する力が強く)、更にそもそもX'・Y'自体、互いに類似している。[15)16)] 対して弾当て代換の文は、述部の［対称性］は高い（X・Yが同じ深層格を担うのはその現れである)ものの、X'・Y'の類似性は保証されない。赤玉－白玉の類似性は高いが雷－避雷針の類似性は低い。従って、この類似性が高い場合のみ等位文・ト文に換言できることになる。念のため言うと(56)(46)は弾当て代換の文でなく、そもそも述部の［対称性］が低いので等位文(58)(59)・ト文(57)(45)と換言できない。

(35) a. 赤玉が白玉に当たった。
　　 b. 白玉が赤玉に当たった。

(51) a. 雷が避雷針に当たった。
　　 b. 避雷針が雷に当たった。

(52) a. 赤玉が白玉と当たった。
　　 b. 白玉が赤玉と当たった。

(53) a. ??雷が避雷針と当たった。
　　 b. ??避雷針が雷と当たった。

(54) a. ［赤玉と白玉（と）］が当たった。
　　 b. ［白玉と赤玉（と）］が当たった。

(55) a.??［雷と避雷針（と）］が当たった。
　　 b.??［避雷針と雷（と）］が当たった。

(56) a. 太郎が花子に突進した。
　　 b. 花子が太郎に突進した。

(46) a. 太郎が花子にキスした。
　　 b. 花子が太郎にキスした。

(57) a. 太郎が花子と突進した。
　　 b. 花子が太郎と突進した。

(45) a. 太郎が花子とキスした。
　　 b. 花子が太郎とキスした。

(58) a. ［太郎と花子（と）］が突進した。
　　 b. ［花子と太郎（と）］が突進した。

(59) a. ［太郎と花子（と）］がキスした。

b. ［花子と太郎（と）］がキスした。

② 弾当て代換を認容しない話者も存在すること。

上述(35)を例にとると、これらの話者は［静止している白玉に向かって赤玉が移動し、両者が衝突する］という事態の表現として、(35b) を認めない。

弾当て代換の文ではX・Yが対象格を担うが、対象格といえば変化を被ることを本質とする。つまり弾当て代換の文は、移動というよりも本質的には変化を表現する文であり、X・Yの表層格は、X'・Y' が被る変化の大小と対応する。より大きい変化を被るものを指示する名詞句がガまたはヲで、より小さい変化を被るものを指示する名詞句がニまたはカラで表示される。ところで変化には［場所の変化（＝移動）］と［状態の変化］が有り、一般に前者は後者より具体的で強い。通常は前者が後者を抑えて表層格と対応し、速いものがガ/ヲ格、遅いものがニ/カラ格となる。結果だけを見れば、この場合は移動の文と変わりが無い。しかし文脈・状況等によって後者が前者を抑えて表層格と対応することも有り、その時文は、格形表示が移動の文とちょうど逆になる。弾当て代換を認容しない話者は、おそらく［状態の変化］の認知に消極的であるか、或いは［状態の変化］の認知に積極的ではあるが［場所の変化］の優位性が強固であるかだと考えられる。

③ 例えば下の(60)は(61)よりも、弾当て代換が認容されやすいこと。

(60) a. ロープを馬につないだ。　　(61) a. ロープを消火栓につないだ。

b. 馬をロープにつないだ。　　b. 消火栓をロープにつないだ。

弾当て代換が認容されやすい状況とは、［状態の変化］が［場所の変化］を抑え得る状況である。従って［状態の変化］が注目すべき、重大な変化であるほど、認容は容易になる。ロープと一体となることで、行動の自由を制約されるという著しい変化が馬には認知されやすいが、消火栓には認知されにくい。

以上、2名詞句が同じ深層格を担うという立場から①②③を説明したが、これらは他の立場からは説明が難しい。例えば既に2.5でも述べたことだが、

弾当て代換は移動のアナロジーでは説明が難しい。Fillmore (1971) は、I hit the ball over the fence が2つの事態を表しており、the ball は前半の事態 [I hit the ball] では目標格を、後半の事態 [the ball went over the fence] では対象格を担うとするが、この考えを援用して弾当て代換を、前後2つの移動事態と考えることは不当である。例えば(62)等、後半の事態 (即ち衝突後) においてホッジス夫人が何らかの「移動」を行ったという説明が、わかりやすいとは思われない。(63)の地面についても同様である。更にこの考えでは上の①の説明も不自然、もしくは困難で複雑になると思われる。

(62) 一九五四年一一月三〇日、アメリカのアラバマ州にすむホッジス夫人は昼食を終えた午後のひとときいつものように居間の長椅子に体を横たえて午睡をとっていた。すると、そこにバリバリドシンとすさまじい音がして、夫人はびっくり仰天してとび起きた。[中略] それからすこしして腰に痛みを感じた。[中略] イン石にぶつかってけがをしたという記録は、現在までのところこれ一つである。

[壷内宙太とスペース探査室 (編) 1990『宇宙の謎　面白すぎる雑学知識』、青春BEST文庫、東京：青春出版社、120.]

(63) 初心者の彼は大きくバック・スイングしてクラブを思いきり振ったが、途中でフォームが崩れ、クラブはボールにかすりもしなかった。ボールから十センチほど離れたところの地面がクラブに辛うじて当たり、乾いた音を立てただけだった。「何度言ったらわかるんだ。ボールをクラブに当てるんだよ。地面をクラブに当てるんじゃないんだよ」とコーチが静かに言った。

5. おわりに

以上、本稿の具体的な主張は(64)の2点にまとめられる。

(64) a. 対称的解釈の種類によって名詞句の担う深層格が変わることは無く、

また［表現者の視点］も深層格には関与しない以上、文太郎が花子と戦うの花子は、いかなる解釈の場合も、太郎と同様、動作主格を担う。

b. 弾当て代換が成立する文（例. 赤玉が白玉に当たった）は、相互解釈を持つニ文・カラ文であり、移動というより変化を表す文である。相互交換される2名詞句（赤玉・白玉）は同一の格（対象格）を担う。

(64)は、「単文中には同じ格が共起しない」という単文異格（Different Cases per Sentence）の原則（Fillmore1971）の限界点である。深層格は、従来考えられていたよりも大まかな文意しか捉えないと言うことができる。

［注］

1) 但し、ここでの「操作」は文の派生操作とは無関係とする。本稿は(a)(b)の一方から他方を派生させる立場に立つものではない。

2) 定延(1990b) 第2章の(ア)が本稿の組織解釈、(イ)(ウ)(エ)(オ)が相互解釈、(カ)が並行解釈、(キ)が独立解釈に対応するが、本稿ではニ文・カラ文に並行解釈を認める（本文で後述）等、多少の変更が加えられている。

3) ここでの「換言」はあくまでルースなものを言う。

4) 「述部」の定義は定延(1990b) に従うものとする。

5) (23)(24)に兄弟のを付けた趣旨を述べる。［1人と1人］が戦ったは、各々の「1人」の帰属組織が明確に異なると想定すれば、並行解釈は必ずしも不可能とは思われない（下の①を参照)。(24)の兄弟のは、この想定を抑えるために加え、(23)にも比較の都合上加えた。

① 赤組も青組も、今では選手が1人ずつしか残っていなかった。そこへ白組が再び攻めてきた。期せずして赤組と青組は共同戦線を張ることになり、赤組の1人と青組の1人は互いの手を握り合った。そして［1人と1人］は白組を相手に戦った。

6) 「ムード」の定義は定延(1990b) に従うものとする。

7) なお、「太郎が花子と一緒になって、何者かに味方して戦った」という解釈を、(26) は、そして (2a) は持ち得るのかもしれないが、これは以上の4種とはまた別の対称的解釈である。この解釈は可能かもしれないが通常は不自然で、(27)(28) の

適格性判断はそれを前提としている。

8) 定延(1990b) では弾当て代換を3類に分けたが、本稿では専らその1類のみを扱い、「弾当て代換」の呼称もこれに限っておく。

9) 但し、［縛られて身動きできずにいるところへ妖艶な謎の美女が現れ、媚態を示しながら頬を寄せてきたので、不幸中の幸いと唇を開けて待ち、接触に至る］といった状況で太郎が美女にキスしたと絶対言わないか、等、疑問は残る。きわどい状況はまだまだ考えられるが、本稿ではこの点をこれ以上追及しない。

10) 勿論、〈あい方〉格を要求しない述語戦うを臨時的に想定すれば、このセリフは仁田説でも説明できる。しかしその想定は同時に、仁田説を反証不可能なものにしてしまうと思われる。

11) 説明の便宜のため、議論に支障の無い限りで例文を統一した。各原典で提示されている例文は、必ずしも本文記載のものと同一ではない。

12) なお、「同時に起こったできごと」という事情を並行解釈の定義におく両説では、例えば「闖入者達を相手に、全ての住人が戦った。臆病者の太郎が戦った。病気の花子が戦った。みんな必死で戦った」という文脈で、下線部が並行解釈を持つとせざるを得ないが、これは両説にとり不都合であろう。たとえ(50)を固持するにせよ、各種の対称的解釈は認知的なものとする必要が有るだろう。

更に井上説は(9)(11)に属する等位文を並行・独立解釈時にしか認めていないようだが、［鎖と紐（と）］を接着剤でつなぐ・［赤玉と白玉（と）］を当てる等、相互解釈時にも十分考えられるだろう。

(9) ［XとY］を　　P。　　(11) ［XとYと］を　　P。

13) これらの命題は項を充足させているとは限らないとする。

14) 様態・ムードが予め議論から除かれていることに注意されたい。例えば太郎も花子も1時から2時までここで運動するなら、2命題［太郎が運動する］［花子が運動する］の妥当する状況は確かに完全に重ならなければならないが、それは1時から2時までここでという様態指定の結果に過ぎず、太郎と花子に関してこの事態が有する対称的解釈は、並行解釈であって相互解釈ではない。

15) 但し卜文には例外が有る。詳細は定延(1990b) を参照。

16) 「X'・Y' 自体、互いに類似している」は、正確には「名詞句X・Yの［対称性］が高い」と言う必要が有る（定延1990b)が、ここでは敢えて簡単に述べた。

[参考文献]

(紙面の都合上、定延1990b に未記載のものに限る。但し拙論はこの限りでない。)

Lakoff, G. 1986 "Frame Semantic Control of the Coordinate Structure Constraint," *CLS* 22 (PART 2), 152-67, Chicago Linguistic Society.

Lakoff, G. and S. Peters 1969 "Phrasal Conjunction and Symmetric Predicates," Reibel and Schane (eds.) 1969, 113-42.

Langacker, R.W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.1, Stanford University Press.

Reibel, D.A. and S.A. Schane. (eds.) 1969 *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.

定延 利之 1989「日本語における格形の相互交換について」京都大学修士論文。

1990a「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」『言語研究』98'日本言語学会、46-65.

1990b「文の［対称性］と名詞句の相互交換」『言語学研究』9. 京都大学言語学研究会、1-57.

1991「SASE と間接性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, 東京:くろしお出版。

forthcoming "Paraphrasability and Deep Cases (tentative)," *Linguistics Colloquium* 1, Kyoto Linguistics Colloquium.